発掘だより No.11　1988.7.10.発行

麻生田大橋遺跡第12次調査の概要

7月10日遺跡見学会資料

豊川市教育委員会では、麻生田大橋遺跡の第12次調査として、今回（A）地点、（B）地点2か所の発掘調査を実施しました。5月23日から始めて6月13日に終了した（A）地点は既に埋戻しが終了し、残念ながら現在その状況を見て頂くことができませんが、麻生田大橋遺跡の調査では、初めて縄文時代晩期の住居跡1軒が検出されています。また、現在調査中の（B）地点では、昨年に引続き方形周溝墓(ほうけいしゅうこうぼ)が検出されています。

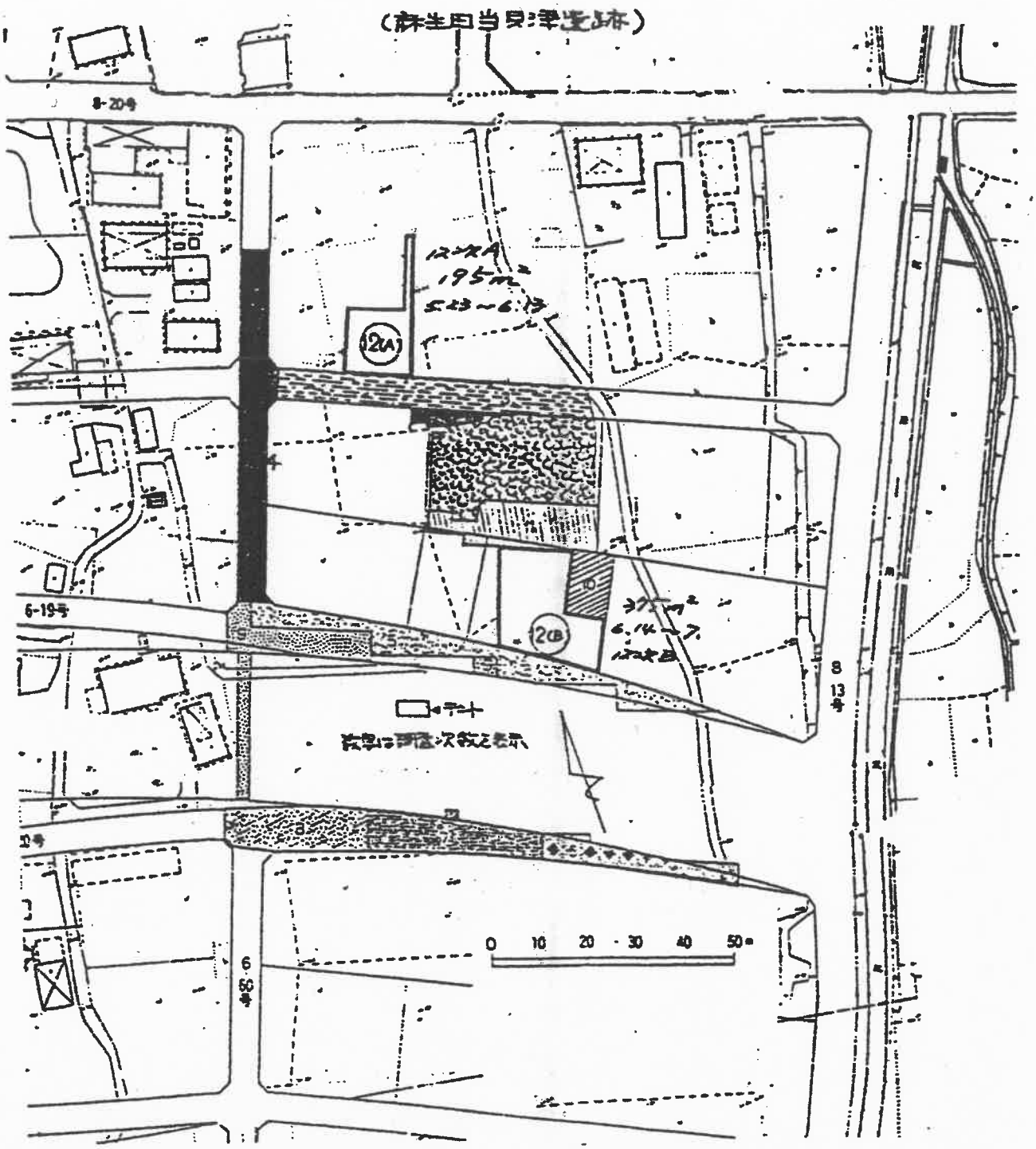
1．遺跡の概要

麻生田大橋遺跡は、豊川右岸の低位段丘上に立地する縄文時代の遺跡として古くから知られてきました。豊川市教育委員会では、昭和52年よりこの遺跡の発掘調査を実施しており、現在までに、遺跡全体の約3分の1にあたる4，000㎡の調査が終了しています。

この遺跡は、縄文時代だけでなく、弥生時代・平安時代・中世・近世に及ぶ複合遺跡であり、いろいろな時代の人々の暮らしの跡が確認されています。なかでも注目されるのは、縄文時代晩期の土器棺が多数検出されていることであり、今回の12次調査までに106基が確認されています。おそらく、遺跡全体では300基を上回る数の土器棺が埋没されたと推定され、東海地方でも屈指の縄文時代の遺跡といえます。

また、昨年の第11次調査を合わせて計4基の方形周溝墓が検出されており、弥生時代に至っても同じ場所にお墓が造られているのは、墓制の変遷を考える上でも興味深く貴重な遺跡といえます。

＋土器棺とは　乳児や幼児が死んだ際に壺や甕に遺体をいれて葬ったもので、あるいは、成人の骨を洗骨して入れたものと考えられます。



▲　麻生田大橋遺跡　調査場所　位置図

†この図面北端の道路より北側は、麻生田当貝津（とうかいづ）遺跡と呼ばれ、縄文時代中期から晩期にかけての遺跡です。実際には大橋遺跡と一連の遺跡ですが、小字名が違うために異なる名称がつけられています。

２．　第１２次調査（Ｂ）地点　調査概要

(1)　縄文時代の遺構

土器棺：計１１基検出されています。ほとんどが深鉢もしくは甕を棺身に用いた単棺であり、壺棺は１基しか出土していません。非常に浅い面から出土していることから、埋没した際に土まんじゅうのような簡単な盛土を施した可能性があります。

使用される土器は、在地の水神平式（すいじんびらしき）土器が目立ちますが、外来の遠賀川（おんががわ）系土器を用いた甕棺も検出されています。遠賀川系土器は弥生時代前期の特徴的な土器であり、縄文から弥生時代への移り変わりを考える上で興味深い資料です。

(2)　弥生時代の遺構

方形周溝墓：溝を四方にめぐらせ方形の区画をつくる墓であり、その内部に穴を掘って遺骸を埋葬したものです。大橋遺跡では、中型の１基と小型の３基が現在までに確認されており、いずれも溝の四隅の切れる形態のものです。ＳＸ２の溝内より昨年出土した細頸壺形土器から、これらの周溝墓は、弥生中期後葉の築造と推定されます。ここに墓を築いた人々は、いったい何処に住んだのでしょうか。

(3)　中世の遺構

中世の遺構としては、土壙（どこう）（穴）、溝等が多数確認されています。このうち、土壙ＳＫ１６は墓壙と推定され、内部より、かわらけ（小皿）が出土しています。また、調査区東南端では長方形の土壙が多数検出されましたが、その性格は不明です。

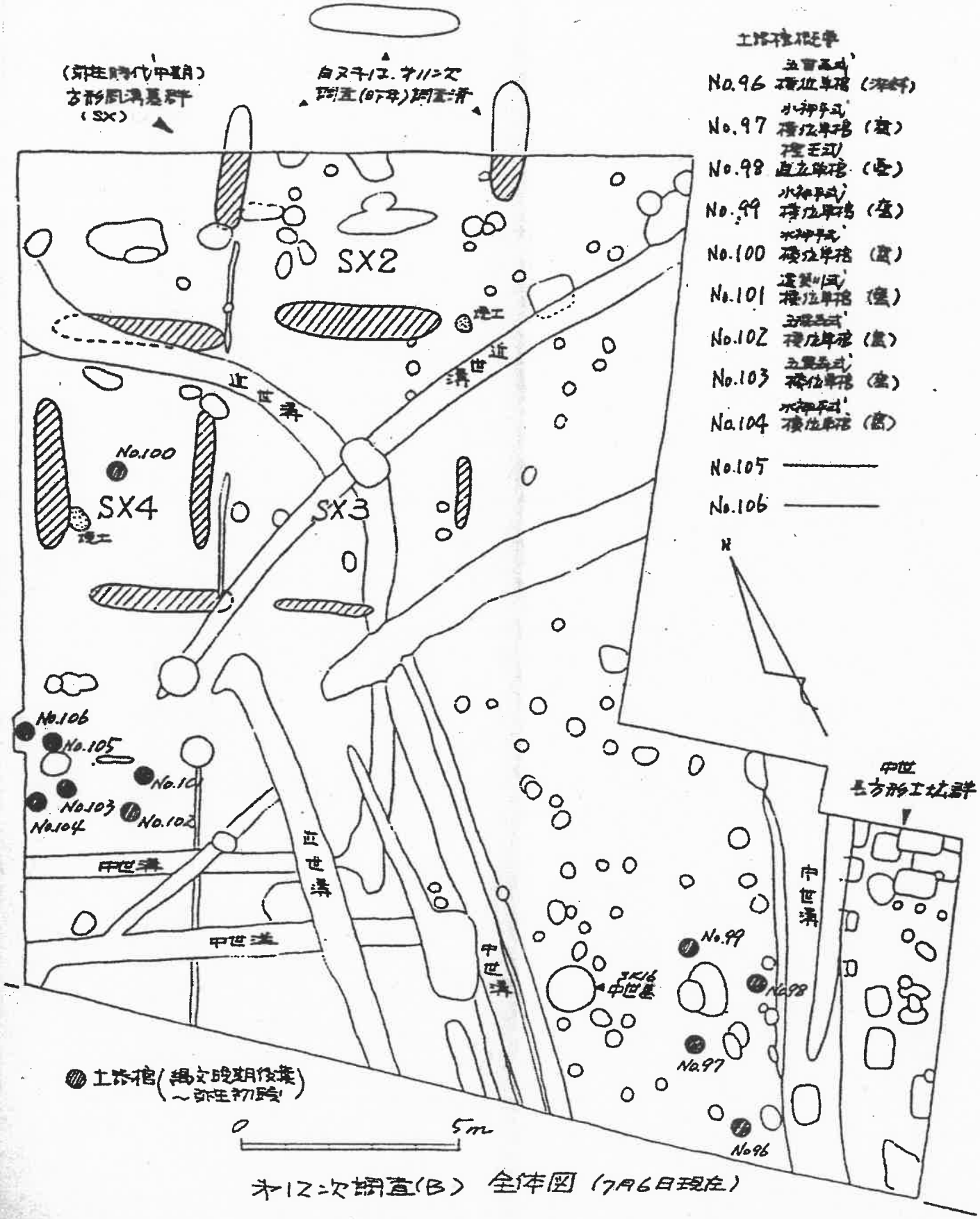
溝の多くは、排水路を兼ねた畑・屋敷等の区画溝と考えられ中世の他、近世のものも存在します。

麻生田大橋遺跡では、長い年月の間でも、あまり土が堆積せず、このように同じ面から様々な時代の遺構が重なって発見されます。

†　麻生田大橋遺跡の土器棺

縄文時代の終り頃(2,000年前)のもので乳幼児の死骸をこの中に入れて大切に葬りました。

――文化広場に展示してあります。――



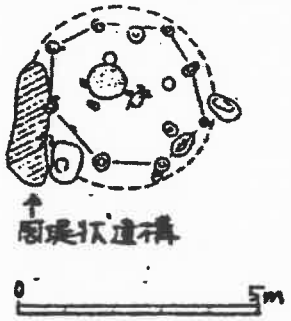
第12次調査(B) 全体図 (7月6日現在)

３．１２次調査（Ａ）地点の住居跡

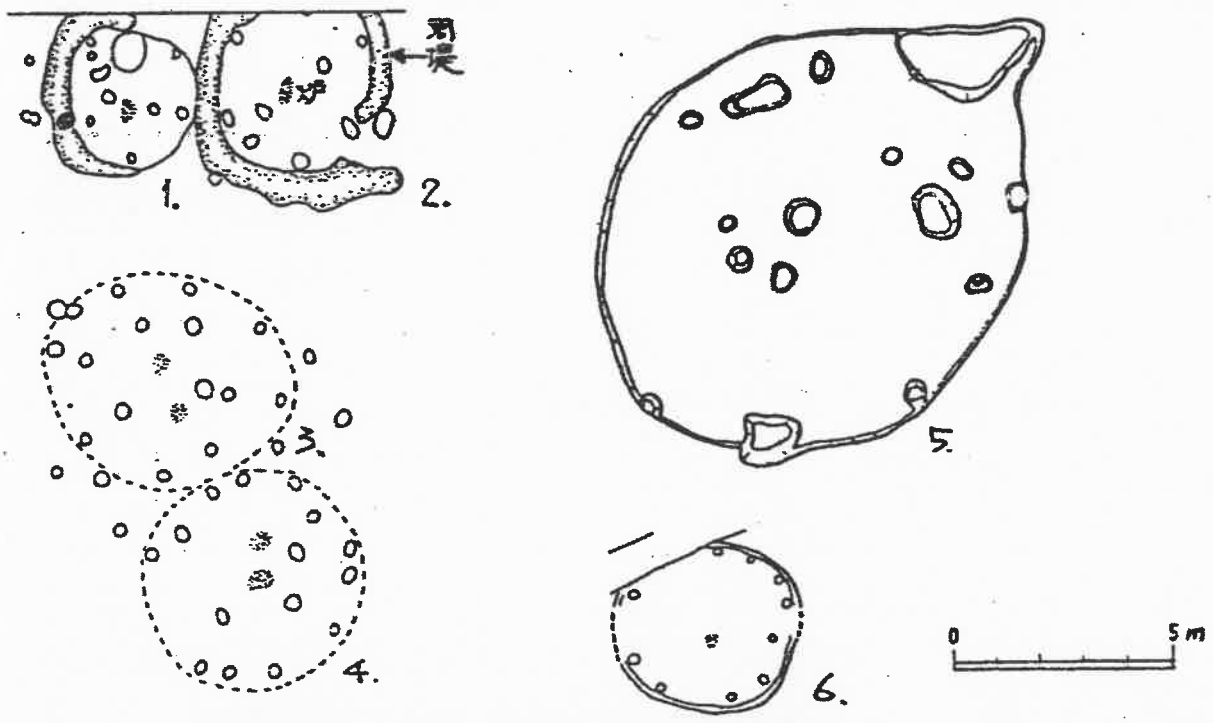
縄文時代の住居跡には、大別して竪穴式と平地式の２種類があります。平地式住居とは、地面をほとんど掘り下げないものであり、まわりに周堤（低い土手）をめぐらす例が知られています。

今回麻生田大橋遺跡で確認された住居跡は、直径４ｍ程度の円形の平地式住居跡で時期は縄文時代晩期前葉の五貫森期のものです。この時期の住居跡の例は、県下のみならず東海地方でもあまり類例がなく、貴重な発見といえます。

今後、大橋遺跡でこうした縄文時代の住居跡の検出例が増えれば、この遺跡の縄文時代の村の姿というものが、より鮮明に浮かび上がってくることでしょう。



麻生田大橋12次調査
A地点の平地式住居



東海地方の縄文晩期の住居跡類例

1～4.	真宮遺跡（愛知・岡崎）	晩期前葉	平地式住居跡
5.	蛇島橋遺跡（三重）	晩期末	竪穴式住居跡
6.	佐野遺跡（静岡）	弥生初頭	〃

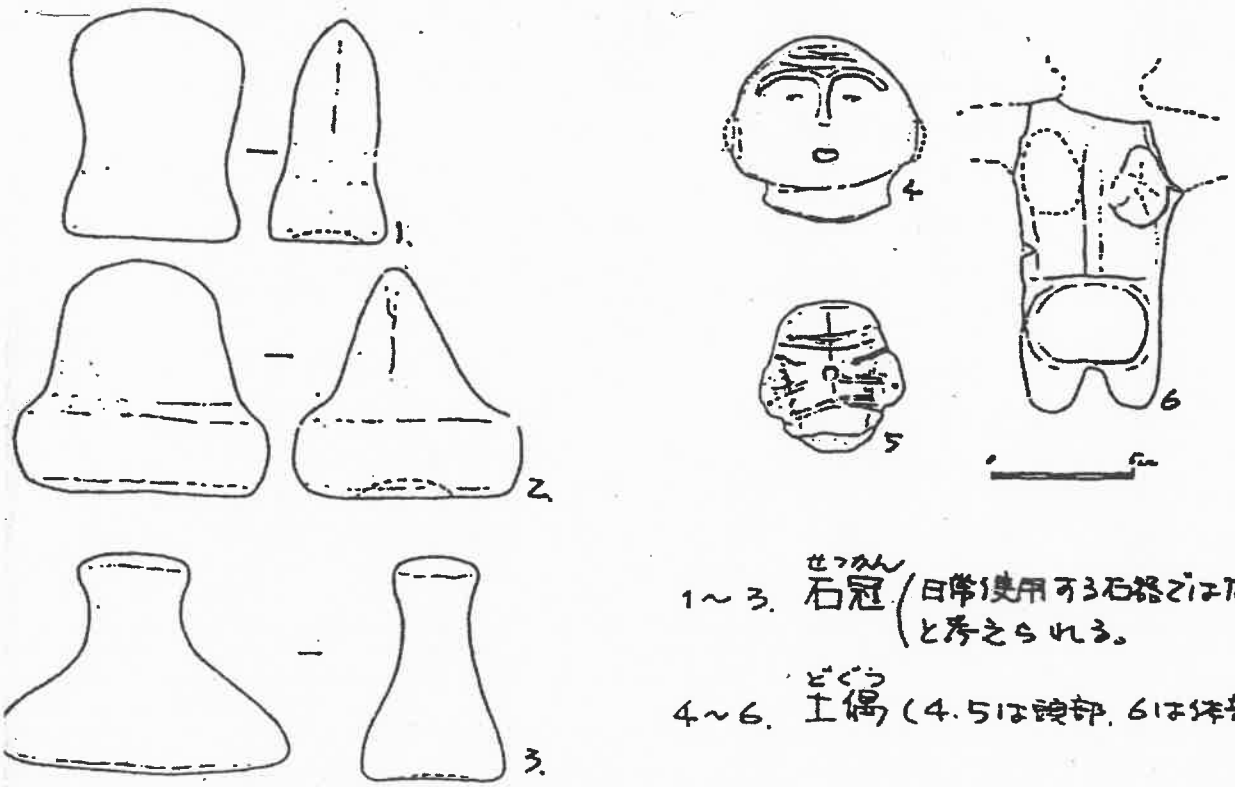
４．１２次調査出土遺物

第１２次調査で出土した遺物の多くは、縄文晩期後葉から弥生時代中期初頭にかけての土器・石器です。土器の多くは五貫森式・煙王式・水神平式（ごかんもり・かしおう・すいじんびら）と呼ばれるこの地方の土器ですが、遠賀川系土器や浮線文土器（おんががわけい・ふせんもん）といった外来系の土器も少量まじっています。

石器は、敲打製（こうだ）の磨製（ませいせきふ）石斧や打製（だせい）石斧が多量に出土しています。未製品が多く存在することから、この遺跡は石斧製作跡といった側面も有していると考えられます。

この他、石鏃（せきぞく）（矢じり）・石錐（せきすい）（キリ）・石錘（せきすい）（おもり）や石棒（せきぼう）・石剣（せきけん）・石刀（せきとう）といった様々な石器が出土しています。（下図石冠も参照）

また、土偶（どぐう）が（Ａ）．（Ｂ）両地点合わせて計６点出土しています。このうち２点は顔面の様子が観察できる好資料で、５は有髯土偶（ゆうぜんどぐう）の一種です。６は頭と両腕を欠損する以外は残っており、乳部の膨らみ、腹部の膨らみが表現されて女性像であることがよくわかります



第１２次調査出土遺物　（略図）